

25  
日の  
シン  
デレ  
ラ

もくじ

25日のシンデレラ

5

番外編 エンゲージラプソディー

259

25日のシンデレラ

十二月二十四日、日曜日。

世間が休日であろうと、恋人たちのアニバーサリーだろうと、私にはあまり関係がない。

社長の第一秘書になって、二年弱。

休日出勤も、午前様の帰宅も、日常茶飯事。デートが流れた回数も、片手じゃ足りない。

だから今日こうして呼び出されたことも、次々と社長から課せられる仕事の量が膨大なものも、想定内。

想定内、なのだけれど……

今日だけは絶対に定時で上がると、私は固く誓っていた。

静寂の中に、ひたすらにキーボードを叩く音が響く。

私の手は休むことなく淡々と仕事をこなし、合間に電話の取り次ぎをし、作成した資料とデータを社長に提出する。

カチカチと時計の秒針が時を刻み、やがて午後五時を告げる。

そこで私は、纏めた書類を秘書課の上司である佐野部長のデスクへと持って行く。

「部長、社長から依頼された資料、完成しました」

部長はパソコン画面から目を上げて、苦笑いしながら書類を受け取った。

「いつも以上に仕事が速いな、九条」

自分の限界に挑戦するぐらい仕事を巻きで片つけた私は、同時に社長の作業速度をも加速させてしまっている。そのせいか社長は数分前に、疲れた顔で一服という名の避難をするため喫煙所へと向かっていた。

「お疲れ、悪かったな」

「いえ。部長もお疲れ様です」

私と同じく休日に駆り出されてしまった部長は、首を横に振る。

「九条が社長を急かしてくれたおかげで、俺も早く家に戻って、家族でクリスマスパーティーが出来そうだよ」

五歳になるお嬢さんがいる部長も、今日はいつになく時間を気にして、そわそわしながら仕事をしていた。

「社長には俺から資料を渡しておくから、早く上がりなさい。楽しみにしていたデートだろう？」

「え……どうしてご存じ……」

そう。最近仕事優先で断ることが増えていたけど、部長の言う通り、今日ばかりは彼との約束

を守りたかった。

でも、定時に帰りたいとは言ったけど、デートとは一言も言っていないのに。

「社長がね、今日の君は一段と綺麗だから、たぶんそうだろうってね」

目尻に皺しわの寄った柔和な笑顔で、部長が答える。

確かに、前日に頭の前から爪の先まで念入りにお手入れをしていた。髪も、ゆるふわ感を崩さないようにヘアアイロンで念入りに巻いている。

洋服はスーツじゃなく、仕事に支障がない程度に、いつもより少しだけフェミニンなワンピースに。

でも、たったそれだけ。それ以外はいつも通り。

髪は癖がつかないようにシュシュで軽く束ねているし、メイクを大きく変えたわけでもない。

なのに、そんな女性の機微きびを敏感に察するところは、さすがはモテる社長だと感心してしまう。

それでいて仕事では容赦をしないところも、仕事中毒ワーカホリックの社長らしい。

「さあ、社長が戻る前に行かないと、また新しい仕事を任せられるよ?」

「それもそうですね。申し訳ありません、部長。お先に失礼します」

私は礼をして荷物を持ち、シュシュを解く。そして一度喫煙所に寄って社長に挨拶をしてから、オフィスを後にした。

§ § §

私の彼——久保要くぼまことと初めて言葉を交わしたのは、十五年前。高校二年生の七月頃だったと思う。

その少し前、高校一年の冬ごろから、私の家に変な電話がかかってきたり、私を隠し撮りした写真や手紙が送られてくるようになった。

五月に入ってからには誰かに帰り道をつけられ始め、六月中旬頃にはそれがほぼ毎日続いていた。それを小学校からの親友に相談し、一緒に帰ってもらおうようになって半月が過ぎた頃のこと。

「ゆかりん、お待たせー」

放課後、その親友が自分の彼氏と一緒に、私のクラスへやって来た。一人の男子生徒を連れて。

大柄なその男子生徒は二人の後ろに立ち、少しつり目がちな瞳で自席に座る私をじつと見下ろした。目鼻立ちがはっきりとした、精悍せいけんな面立ち。スポーツマンらしいイケメンの彼のことは、私も顔と名前だけは知っていた。

「……久保君?」

確か彼はF組のクラス長。A組の副クラス長の私とは、クラス長会議に出席した時に何度か顔を合わせている。

でも、話をしたことはない。

赤茶けた色に染まった短い髪に、百八十センチは超えているであろう高身長と広い肩幅。半袖の

カッターシャツから覗く腕は筋肉質で、いかにも『男の人』という感じがした。

同学年の男の子の中にもひと際目立つその立派な体躯には、威圧感すらある。しかも彼は会議の間ずっと、眉間に皺を寄せていたのだ。

こ、怖い……

それが、第一印象。何だか近寄りがたかったから、私は遠目で見るだけだった。

だからその日親友が彼を連れてきた時も、真っ直ぐ顔を見られなくて、すぐに俯いてしまった。

「あれ、友伽里ちゃん、要と知り合い？」

「あ……その、クラス長会議で一緒になったことがあって」

「そうなんだ。要は、僕の小さい頃からの友達なんだ。要、彼女が話してた九条友伽里ちゃん」

親友の彼氏が、そう紹介してくれる。私も立ち上がって挨拶すると、ふわりと彼から良い匂いがするのに気付いた。

それが男性物の香水だと知ったのは随分後のことだけど、この時は、随分と大人びた人だなと感じた。

「九条友伽里です。こんにちは」

「……久保要だ」

ぼそりと呟くような自己紹介だったけど、低音でよく響く声だった。

「もー、何かカッコつけてんの、要君！」

小柄な親友が笑いながらバシバシと彼の腕を叩けば、要は片眉をひそめてため息をついた。

「今日からこの二人も、日替わりでゆかりんと一緒に帰るからね」

「……はい？」

事情がいまいち呑み込めず首を捻っていると、親友が詳しく説明してくれた。

彼女も私と一緒に帰る時、不審者がついて来るのを見て不安になり、彼氏に相談したらしい。

それで彼氏は、女の子だけで帰るのは危険だから男も一緒に帰った方が良いと判断し、自分の親友にも声をかけてくれたのだそうだ。

「でも、それだと迷惑が……」

何だか申し訳なくて断ろうとした私を、親友が一喝する。

「ゆかりんが、変態に拉致でもされたらどうするの！」

「要は、柔道、空手、剣道の有段者なんだよ。体格も良いし、少し目つきが鋭いから、凄まじいたら怖そうだから？ 相手を上手く牽制できると思うんだ。だからボディガードに使ってよ？ 要も、事情を話したら協力したいって言ってくれたから、気にしないで」

「……そう……なの？」

そっと見上げれば、無言のままじっと私を見ていた彼が、小さく頷いた。

初めて会ったばかりの要は、そんな感じでほとんど喋らなかつた。なので私の頭の中では寡黙な人という印象が強かつた。

その日以降も、言葉のキャッチボールがあまり出来ないし、話題も見つからないし、しばらくどう接したらいいのか分からなかった。

それが変わったのは、出会って一週間くらいした頃。

両親は仕事、弟たちは水泳教室に行っていて、家に誰もいない日だった。

「久保君、今日はありがとう」

家まで送ってもらうのは、それで二度目だった。マンションの三階にある、自宅の玄関前でお礼を言えば、じっと私を見つめていた要と目が合った。

「いや。……今日は、手紙がなくて良かったな」

一階にあるポストには、今日は手紙や写真は入っていないかった。

でも、手紙がない日は変な電話がかかってくる。

私ที่บ้านに帰ると、ほぼ同じぐらいのタイミングで……

ふと電話口の声を思い出して、ぞっとした。

「じゃあな」

「待って！」

帰ろうとした要を、私は思わず呼び止めた。

「なっ……く、九条？」

要が驚いたように振り返りながら私を見下ろす。そしてふと、大きなため息をついた。

「……不安か？」

「……っ！ あ、ごっ、ごめんなさい！」

心配そうに顔を覗き込んでくる要を見て、私は自分が彼の腕に掴まっていたことに気付く。

すぐに手を離して後ろに下がろうとしたら、靴の踵がコンクリートの段差に引っかかって、その

まま後ろに倒れそうになった。

要は咄嗟に手を伸ばして、私の腕を掴んで支えてくれる。

「危ないだろ、お前……」

「ご、ごめんなさい……」

「……気をつけろ」

機嫌を損ねたように眉間に小さな皺を寄せた要が怖くなり、私は俯いてしまった。

「あ、いや、別に……怒ってない」

ちやうどその時、要の言葉にかぶさるように家の電話が鳴り始めるのが玄関の扉越しに聞こえてきた。

その瞬間、びくりと身体が震えてしまう。

動かなきゃって思うのに、もしいつもの気持ち悪い電話だったらと思うと、足が震えて動けない。

「……電話、一緒に聞いてやろうか？」

思わず顔を上げると、真っ直ぐ私を見つめる要の瞳がある。

私は縫すがるように頷うなずいていた。

すると要は私の手を掴み、「邪魔する」と一言添えて家の中に入った。リビングにある電話は、まだ鳴り続けている。

留守番電話にはしていない。変なメッセージを残されるのが嫌だから、わざと設定しないようにしていた。

だけど、要はさっと留守番電話機能のボタンを押した。無機質な音声案内が聞こえた後、ピーツとメッセージを促うながす音が鳴る。

いつものように、電話口でひどく切羽詰まったような呼吸音と、呻うめく声が聞こえてきた。そして少しすると、電話の相手は私の名前を呼びながら卑猥ひわいなことを呟つぶやき始める。

その声に、要の左の眉頭まへづらには痕あとが残りそうなほどに深い皺しわが二本出来る。

「……いつも、こんな感じか？」

「うん……ほとんど……」

「ちっ、下種野郎げすやろうが」

要が舌打ちをする。

そして突然、受話器を取った。

「おい、てめえ！ 誰に断って友伽里でマスクかいてやがるっ！ イキがつてると潰すぞ！」

低くドスの利いた声で一喝した要に、私は固まった。

あまりの迫力に、怖いを通り越して思考が止まってしまったのだ。

……あれ、そう言えば、私、名前で呼ばれた？

どさくさ紛れだったけど、その時、初めて要に名前を呼ばれた。でも不思議と、馴れ馴れしいとか嫌だとかは思わなかった。

要はゆっくりと受話器を下ろした。

「……どうした？」

瞬まはたきも忘れて凝視ぎょうしする私に気付いたのか、彼はぼつの悪そうな顔をした。

「悪い。ビビらせた」

「……大丈夫。ちよっと、声に驚いただけだから」

「……そうか。九条、俺、もう少しここにいっても良いか？」

「え？」

「また電話が来たら、撃退する」

「……いいの？」

「ある程度ビビらせれば、しばらく電話は落ち着くはずだからな」

「はい、お願いします！ お礼に、晩御飯食べて行ってください」

いつもはこの後も頻繁にかかってくるから、出来れば一人でいたくなかったのだ。

何より、あの気持ちの悪い電話だけでも止まるなら……その時はそんな気持ちで要にお願いして



いた。

結局、その日はそれ以上電話がかかってくることはなかった。要の一喝が効いたみたいだった。晩御飯の支度をした後で、要に頼まれてこれまでに送られてきた手紙や写真を見せた。

私がすべてを話し、要もすべてに目を通し終えたところで、彼がぼつりと言った。

「この犯人、去年の学祭の時にいたかもしれないな」

「どうして？」

「手紙に、お前のことを百合姫<sup>ゆりひめ</sup>って書いてある。九条、去年の学祭のミスコンで、『百合』の姫になっただろ？」

「え、ええ……」

うちの高校には投票によるミスコンテストがある。しかもどういうわけか、『薔薇<sup>ばら</sup>』と『百合』の部門で一人ずつ選ばれ、毎年その結果を学祭で発表するのだ。しかも選ばれた人は、次のミスコンテストまで花の名前下に『姫』とつけた通り名で呼ばれるという、罰ゲームのようなおまけつきだ。

ちなみに私の場合、別に美人だから選ばれたってわけじゃない。恐らくスポーツテストで前代未聞のマイナス評価を叩き出してしまったことで名前が校内に知れ渡っていたから、面白半分で投票されたのだと思う。

何にせよそのコンテスト以来、知らない男の人に声をかけられるようになった。最近はストー

カーの件もあって、男の人が一人で近付いて来ると怖くて逃げてしまう。

「その名前を知ってることは、去年の学祭にいた奴<sup>やつ</sup>ってことだ。学祭には外部の人間も出入りするから、そういった奴が犯人とも考えられる。手紙や写真を見る限り、去年から今年の三月前にかけては校内の写真や、学校行事に関与したような内容の手紙が多い。けど、四月以降は校内に深く入り込んだ様子がない。そうなると、今年卒業した奴が異動した教師、三月まで学校に出入りしていた業者の線が高い……いずれにせよ、相手を尾行して、家と名前を割り出した方が早いな」

要は集めた情報から犯人像を導き出し、淡々と、だけどとても饒舌<sup>じょうぜつ</sup>に語っていく。

私なんて怖がるだけで、手紙を読み返すことも出来なかったのに。

「……すごいね、久保君」

「何がだ？」

「私……そんなこと、全然、気付かなかった」

「当たり前だろ。毎日、一方的にあんなクソみたいな電話受けて、こんな気色の悪い手紙やら盗撮写真やら送りつけられたら、読み返すどころか思い出したくもないだろ、普通」

事実要が言うように、怖くて、見たくなって、封を開けられずにいた手紙もたくさんあった。

「普通……なの、かな」

「ああ。おまけに、精神的にまいると思惑も鈍<sup>鈍</sup>る。むしろこれまで、よく耐えて頑張った。もう、一人で頑張らなくて良いぞ」

こんなことをされる自分が悪いのかも、と悩んでいた私は、この時の要の言葉に救われた。

飾りつ気のない、そっけなさすら感じる言葉だけど、最後の一言はとても温かく、労るよう<sup>いたわ</sup>に告げられたから、肩の力が少し抜けた。

「出来るだけ早いうちに犯人見つけてやる」

「……うん」

「何かあったらすぐに俺に連絡しろ」

「でも……送ってもらうだけでも、大変なのに……迷惑になるわ」

「迷惑じゃない。だから、絶対に呼べ。お前がちゃんと笑えるように、守ってやるから」

真っ直ぐで真剣な眼差しと、力強いその言葉に、ジワリと胸が温かくなった。

「うん……ありがと……う」

ひどく心細かった心に要の優しさが沁みて、気付いたら涙があふれていた。

「っ!? な、なんで……泣いて……おい、どうした!？」

「ごめっ……」

涙を止められない私に激しくうろたえた要は、それから一生懸命私を泣きやませようとしてくれた。

その時私は、ああ、この人は機転が利いて、頼もしくて、とても優しい人なんだって思った。

要が私の“気になる人”になったのは、たぶんこの時からだった。

それから要は三ヶ月かけて犯人を割り出し、証拠を揃えてくれた。

犯人は、私たちの二年上の先輩である大学生だった。

その頃はストーカー規制法もなく、犯人が事件を起こさないと警察も動いてくれなかったので、要が直にストーカーと話をしてくれた。相手は逆上して要に襲いかかったけれど、要はそれを一人で取り押さえた。実は万が一のために、要の通う道場の師範<sup>しはん</sup>をしている元警察官の人たちが見えな<sup>い</sup>所で待機していたらしいけど、何はともあれ大事がなくてほっとした。

だけど、ストーカーが捕まって、もう恐いことはないと分かかって安堵するのと同時に、これまでのように要と一緒にいる機会がなくなることも気付いてしまった。

そこで私はやっと、要を好きになつていたことを自覚した。

でも、要は親切心で私を助けてくれただけ。迷惑をかけた覚えはあっても、好かれる理由は思い当たらなかつたから、告白しようなんて思わなかつた。

そして平穏な日々が戻って、要と会うこともほとんどなくなつて一週間が経つた頃。要が放課後に私の教室にやつてきた。

彼は眉間に縦皺<sup>たてしわ</sup>が一本立つた難しい表情で、しばらく無言のまま私を見下ろしていたのだけれど、突然、

「九条、俺と付き合え」

と言ってきた。

「……どこに？」

反射的に答えてしまった私の一言に、要の顔が怖くなる。

私、何か間違えたのかな……。」「はい」って、素直にお出かけの誘いに頷けば良かったのだからか。

そんなことを色々考えていたら、要は頭を押さえて低く唸った後で、また睨むように私を見下ろしてきた。そして――

「俺の女になれって意味だよ！」

そう言ってそっぽを向いた。

それが言葉足らずの告白で、その時の彼がものすごく照れていたということに気付いたのはすぐ後のこと。

私は嬉しくて恥ずかしくて、俯うつむいて小さく「はい」と答えるのが精いっぱいだった。

§ § §

要との関係は、付き合い始めた当初からお互いの親公認だった。

彼は、初めてのデートで私の家に迎えに来た時に、両親に挨拶と交際宣言をしてくれた。

「友伽里さんと交際させていただいています、久保要です」

ストーリー事件の折、既に要は両親と顔合わせ済みだったけれど、改めてそんな風に堂々と挨拶してくれたことが、嬉しいと同時に、ものすごく恥ずかしくて照れくさかった。

両親は驚いた顔をしたものの、父は少し複雑そうに、母は嬉しそうに交際を認めてくれた。

私も、ほぼ同時期に彼の家族と挨拶をした。

要のお母様は病気でもう亡くなっていただけ、要と目元の似た優しいお父様、要とそっくりな双子の弟の真幸君、そして兄弟同然の付き合いという従兄妹たちにも紹介されて、笑顔で「要をよろしく」と挨拶された。

それから、お互いの家に遊びに行くことも増えた。

要の家と私の家は同じ沿線にあっただけれど、上りと下りで全く別方向だったため、一緒に帰ることはなかった。その代わり、要はよく学校帰りに私の家へ来てくれた。

私には、友樹ともきと理哉りさという年の離れた弟がいて、友樹とは七歳、理哉とは十四歳年が離れている。共働きの両親に代わってほぼ毎日、私が二人の夕食の支度や世話をしなければいけなかったのだ。要と一緒にいる時間を増やすためにそうしてくれたのだ。

とはいえ要が家にやって来ると、下の弟は何故か彼に悪戯いたずらばかりし、上の弟は要にものすごく懐いて纏わりつくという両極端な対応をしていたものだから、私と要が二人つきりになることはまずなかった。

彼の家でも従兄妹が遊びに来ることが多く、高校生の頃は、二人つきりになれるのは外でのデートぐらいだった。

「友伽里、次の日曜日、空けとけ」

要はいつも、そんな感じでデートに誘う。

デートに限らず、「帰るぞ」とか「○○行くぞ」とか、彼は常に私に対して決定事項で物を使う。細かいことはほぼ説明されずに、言うだけ言って私の返事を求めない。

主導権はいつも、要だった。

近くで私たちの会話を聞いていたクラスメイトに、「無理強いされてない？」って聞かれたことも度々ある。

確かに最初は、有無も言わずどんどん物事を進めていく要にどうしたら良いのか分からず、私は彼の顔色をうかがい、ただついていくばかりだった。

だけど、気付いたの。

無愛想な彼の、小さな表情の変化とその胸の内を。

本当に小さな変化——彼のことをよく知らないで見逃したり、不機嫌のだと勘違いしてしまう本当に些細な表情の変化が、実は驚いていたり、困っていたり、照れ隠ししているものだったことを。

そして強引に見えるのに、実はとても気を使っていたことを。

彼は、ストーカー事件のせいで男の人や人混みが恐くなり、街の中をあまり歩けなくなってしまう私を、人の少ない場所から少しずつ賑やかな場所に出られるよう慣らしてくれていた。戸惑って尻込みしそうな私の手を取って、ずっと、私の前を進んで助けてくれていた。

言葉足らずで、何が言いたいのか分からないことも多かったけど、決して無理強いはしなかったし、デートはいつも私が行きたいと思っていた場所や見たかった映画、食事してみたかったお店だったりした。

私が無気なく口にしたことでも覚えていてくれるのが嬉しくて、多少強引でも嫌だなんて感じたことはなかった。

十七歳のクリスマスイヴに、『いつか左手の指にもっといい指輪をやるから、今はそれで我慢しろ』と言って右手の薬指にペアリングを嵌めてくれた時、すごく嬉しかったことも覚えている。今でも、その指輪は私の宝物だ。

その後大学入学を機に、要は一人暮らしを始めた。

掃除や片付けは得意なのに、料理はほとんど出来ない要のために、私は定期的に料理を作りに行くようになった。

でも、そんな段階になっても、私はまだヴァージンだった。

高校生の頃はキスぐらいしかしなかったし、要のアパートに行くようになってからも、身体に触れられるだけで一線を越えることはなかった。そしていつも、日付が変わる前に家に送られる。

もしかして私に女としての魅力が足りないのかと、真剣に悩み始めた夏の初め頃……

その日は土曜日で、彼の家で一緒に夕食を取った。その後、自然と抱き寄せられ、口付けを繰り返すうちにそんな雰囲気になって、ソファの上で要に身体を暴かれた。

いつもと変わらず、要が私に触れて、私だけが乱されていた。

「んっ……ああっ」

上着の裾から彼の手が入り込み、ブラのホックが外れて出来た隙間から、その手の大きさには足りない胸の膨らみをやわやわと揉みしだかれる。指先が胸の尖りをぐにと押しつぶせば、堪えていた声が小さく漏れた。

スカートの中でも、まだ誰も受け入れたことのない私の中に要の指が入り込み、濡れそぼった肉壁をかき混ぜる。

ぐちゅっ、ぐちゅっ、音を立ててそこが彼の指を呑み込む度に、身体が揺れた。

間近にある要の顔が、うつすらと色気を帯びた笑みを浮かべる。

「ようやく、三本でも馴染んできたな」

初めは、太い要の指が一本入るだけでもきつかった。一本、また一本と時間をかけて増やされる度に苦しさや小さな痛みが伴ったけど、それも次第に滑らかに受け入れられるようになっていた。

ゆっくりと前側の壁を指の腹で擦られ、剥き出しの濡れた花芯を親指の爪先で円を描くようにな

ぞられる。すると、ぬちゅっという水音が静かな部屋に響いた。

「ひいんっ！」

同時に身体に電気が走って背中が大きく仰け反り、私は顎を突き上げるようにして声を上げた。要の肩に乗せた指にも力が籠る。

ソファの上に座った要に向かい合う形で膝の上に乗せられ、いつもよりも近い位置にある要の瞳が私の痴態をじっと見つめている。

私の服はもうはだけつつあるのに、要の服は全く乱れていない。

それまで彼の目の前で、肌を露わにしたことはほとんどなかった。それでいて身体は彼によってどんどん開発されて、触れられる度に乱れた姿を無防備に晒してしまふ。そのことが尚更に私の羞恥心を煽る。

「やつ、それ……んんっ！」

無防備な喉元に何度も口付けを落とされ、その度に、彼の香水——サムライの芳香が鼻腔をくすぐる。傍にあることが当たり前になった彼の香りが一層強く感じられ、身体はさらに敏感になる。

「すっかりドロドロだな」

わずかな興奮を含んだ要の音が、誘惑するように私の耳元に囁いてくる。

最初は、要に触れられてもくすぐったいだけで、身体の中に入る指にも、異物感と圧迫される苦しさ、そしてジクジクとした痛みしか感じなかった。

なのにこのところ、同じように触れられているはずなのに、むずむずとするような気持ち良さが身体の中で暴れて、私の脚の間から蜜をあふれさせる。

指で中も外も弄られる度、その場所から腰にかけてビリビリとしたものが駆け上がり、知らず逃げるように腰が浮いて、もぞもぞしてしまふ。

「腰が揺れてる」

「ふっ……やあ……」

要の嬉しそうな声が意地悪くそれを伝えてきたので、私は恥ずかしさのあまり、彼の手から逃げないようにソファの上で膝立ちになる。

すると胸に触れていた手が私の背に回り、そのまま引き寄せられた。と同時に、まくれた衣服の隙間から覗く肌に、要が舌を這わせる。

彼の唇は、お腹と胸の境界線から辛うじて服に隠れていた胸の膨らみを辿り、やがて含むように先端に口付ける。そのまま痛いほどに立ち上がった胸の尖りを、ぬるりとした肉厚な舌で絡め取った。

「あ、はあ……んっ、要っ」

「これも、感じるようになったな」

確認するように咬いた要はちゅつと吸いつき、甘噛みして舌で先端を撫でる。

胸からぞわぞわとした甘い感覚が走って、腰が震える。

「やっ、あっ、吸っちゃ」

「お前だって、俺の指に食いついてるぞ」

「んあっ」

ぐっぐっした指は下の方で生き物のようにはらばらに動いて、水音を立てながらスローペースで抽送を繰り返して、花芯を擦り上げる。

強張っていた肉壁を押し広げられ、時折奥をぐっと強く圧迫されると、震えるような刺激が走ってきゅっと私の中が締まる。

少しずつ要の指の速度は速まってく。震える部分を確実に押さえながら蠢く指に、私の身体が幾度も跳ねた。身体の奥がじわじわと熱くなり、気だるい吐息が喉から漏れていく。

心臓の鼓動が速くなって、息をするのさえ苦しいのに、身体は感じたこともないもどかしさに震え、もつとその刺激を求めてしまふ。

「んっ！ 要っ、……変っ、あ、熱い」

零れる自分の声がどんどん甘ったるくなって、自分のものではないみたいに聞こえる。

私は掌で自分の口を覆い、上を向いて声を堪えた。

「声、我慢するな」

「んんっ、ふっ……」

恥ずかしくて首を横に振れば、要の指の動きは一層激しさを増す。与えられる刺激が痺れるよう

な甘く切ない疼きを伴い、私の身体を侵食して膨れ上がる。

「やつ、はあっ……も、要っ、やだっ……」

気が遠くなるような、苦しいような、そして気持ち良いような感覚が波を打ちながら襲ってきて、身体が仰け反っていく。

「ああ、楽にしてやる」

その言葉とともに深く潜り込んだ要の指が、子宮をぐっと押し上げた。ごっごっとした指が中で捻じれるように動き、彼の親指が弄っていた粒を強く押し潰す。

すると私の肉壁は啞え込んだ彼の指を一層きつく締め上げ、その瞬間、身体の中で何かがはじけた。

「あああっ！」

一瞬にして目の前が白くチカチカとなり、がくがくと腰が震える。堪え切れずに要の膝の上にしやがみ込み、縋るように彼に抱きついた。

「イけたな」

「い……く……」

初めての感覚に身体力が抜けて、ただ息を乱すばかりの私は、要の胸にもたれたまま、ぼんやりと今の言葉を繰り返す。要はその声を呑み込むように唇を塞いできた。

「っ！ ふう、んっ……」

口付けの間、ゆつくりと要の指が私の膣内から抜けていくのが分かる。

クチュツと音を立てて圧迫感から解放されたそこは、何故かジンジンと痺れていて、物足りなさすら感じる。

「……友伽里、ベッドに行くぞ」

要は甘さに乗せた声で低く囁いたかと思うと、そのまま私を抱きかかえながら立ち上がる。

「えっ！ う、嘘っ!? 私、重いのに」

「お前、細いくせに何言ってる」

まるで子供のように軽々と抱き上げられたのに驚いて、思わず彼の身体に腕と脚を絡め、ぴったりと抱きつく。すると私と要の間に、硬いものがあるのに気付いた。

要が歩く度、それは彼のズボン越しに私の脚の間に触れ、私の敏感な花芯が突き上げるように刺激される。ビリッとしたその刺激に、無意識に腰がくねった。

「ふっ、んんっ！ あ、あるいちや、ダメっ」

「っ、擦りつけて言う台詞か」

小さく息を呑みながら要は大腿で歩き、ベッドの前で足を止めた。

「か、要……」

「なんだ」

「あ、あの……どうして、ベッド？」

そう問いかけた時には、ベッドの上で要に押し倒されていた。

「続きをするに決まってるんだろ」

そう言っただけの唇に軽くキスを落とす。要は、身体を起こして勢い良くシャツを脱ぎ、ベッドの外に投げ捨てる。

「惜しげもなく晒された無駄な肉のない筋肉質な身体に、私の心臓が暴れる。

「最後までやるからな」

突然の宣言に、腰の奥が疼いてゾクリとする。

目を細めながら身体を屈め、私の顔を覗き込む要の表情が淫靡さを纏う。その色気に呑み込まれそうで、私は思わず後ずさりしてしまう。

ふと見ると、真摯に見つめてくる深い褐色の瞳が、張り詰めたような緊張感を漂わせていた。

それは要が空手の試合の時に見せる、獲物を狩る獣のような眼差しにも似ていて、私はそんな彼から視線を外すことが出来ない。

四つん這いのまま一歩、要が近づいてくる。なのに私は無意識に一歩下がってしまう。

そうすれば、要が無言のまま、また一歩近づく。

それを数回繰り返すうちに、私の背中にベッドのヘッドボードが当たり、動けなくなる。

要の両手が、挟むように私の両サイドに置かれる。そうして覗き込んできた要に、思わず息を呑んだ。

いつもと違う雰囲気、要が、少し怖い。

吐息が重なる距離にきた要に対し、思わず目をきつく閉じて身構えてしまう。

けれど、何もされる心配がない。恐る恐る目を開けば、すぐ傍に要の気遣わしげな顔があった。

「怖いか？」

「……少し」

好きなのにそう思ってしまうことが申し訳なくて、彼をまともに見られず目を伏せた。

「友伽里、俺を見ろ」

恐る恐る見上げれば、分厚くて硬い大きな手が、そっと私の頬をなぞる。

壊れ物を扱うような繊細な動きは、いつもと変わらず優しい。

「触れられるの、嫌か？」

慌てて首を横に振る。

「するのも嫌か？」

「そ、そんなこと！ ……な、ない」

思わず大きな声が出てしまい、恥ずかしくなる。すると要が薄く笑った。

「そうか。正直、俺も限界だった」

「……限界？」

「お前を恐がらせたくなくて少しずつ慣らしてきたが、早くお前と一つになりたくてたまらな



かった」

滅多に聞くことのない要の本音に、涙が出そうになる。

すぐに抱かずに、身体を弄もよってくるだけだった要。その理由を言ってくれなかったから、すごく不安だった。

「私……要が最後までしないのは、私に魅力が足りないからだだって思っていたの……」

「……そんなわけあるか」

そう言つて要は私の手を取り、その手を自分の股間へと導いた。

「か、要っ……」

布越しに触れれば、硬く膨れ上がったそれがピクリと動く。

驚いて手を離そうとしたけれど、掴んでいる要の手が許さない。

幼い弟のものしか見たことのない私には、それと彼の大きく膨れたものが同じだなんて、全然思えない。

「分かるか？ お前を抱きたくて、こうなってるの」

「……こんなに腫はれて……痛くないの？」

私の素朴な疑問にわずかに目を見開いた要は、何だか困ったような表情をして手を離れた。

「……辛いが、痛くはない……友伽里、出来るだけ優しくする。どうしても嫌なら、言え」

「うん」

そのまま重なった唇は、チュッチュツとリップ音を立てながら、軽く触れては離れていく。

いつもより優しいキスに、少しずつ身体の力が抜けていく。

私も要の唇を軽く食はんで応えた後、自分から唇を重ね、彼の背に腕を絡めた。すると要の腕が私の腰を抱き寄せる。

閉じていた私の唇を、要の舌がつつくように撫なでる。

私が唇を薄く開けば、ぬるりと要の舌が入ってきた。

「んっ」

器用な舌先が、逃げ腰の私の舌先をまたつづく。それから上顎をじっくりと舌で撫で上げられれば、口の中が甘い痺しびれで満たされた。

「舌出せ」

「あっ、ふっ……」

言われるままに舌を差し出すと、そのまま強く吸われ、絡め取られた。彼の動きに合わせてるように夢中でキスを繰り返せば、舌がジンジンと痺れ、頭が恍惚こうこつとしてくる。

身体の中に爛くすっていたもどかしい感覚が、また熱を持ち始める。

そのキスの最中、要は私のシャツのボタンを片手で器用に外し、襟えりを大きく開いて袖を抜いていた。そのままシャツも、外れかけのブラも取り払い、ベッドの下へと投げ落としていく。

スカートもホックを外され、するりと脱がされた。

既にショーツはソファの上ではぎ取られていたから、私は一糸纏わぬ姿になる。

「ちよつと目を閉じて待つてる」

私をベッドに押し倒した要が、何か思いついたように口付けを止め、ベッドから離れた。私は腕で胸元を隠して、言われるままに目を閉じる。

ズボンを脱ぐ衣擦れの音とフィルムを破るような音の後、少しして要が戻ってくる気配がする。ベッドが軋んだと思ったら、唇に温かいものが触れた。

「もう、良いぞ」

目を開けば間近に要の顔があり、またキスをされた。

彼の膝が私の脚を割り開いたかと思うと、その間に彼の身体が入ってくる。そうして腰を持ち上げられながら引き寄せられると、腰が浮く姿勢になった。

無防備になった場所に、硬いものが触れる。

「は、あんっ」

割れ目に沿って、ゆつくりと上に擦りつけられ、にちゅつと音を立てて花芯が潰される。私の身体は大きく震え、声が漏れた。

それからまた下へと動いたそれが蜜口に触れ、静かな部屋にまた水音が響く。

熱を孕んだ塊が入口を軽く突くと、奥がキュツと締まった。

「んっ……要……」

「……良いか？」

頷いた瞬間、ぐつとそれが入り込んでくる。と同時に、私の身体に激しい痛みが走った。

「んんっ！ い、いたっ……」

要が奥へ進もうとする度、押し開かれるような圧迫感と痛みが走り抜け、腰が引ける。

堪えるために、腰を掴む要の手をきつく握り、目を閉じて下唇をかみしめた。

「友伽里、俺を見ろ……俺から目を逸らすな」

瞼を開けば、苦しげな顔をした要の姿が見える。

「もう少しだけ、我慢できるか？」

何度も頷いて答えれば、また彼は口端を吊り上げて笑う。

ひどく蠱惑的な色気を含んだ彼の表情から目が離せず、私は息を呑んだ。

ただ腰を掴む要の手に力が籠った瞬間、身体の奥に強い衝撃が走る。

「ひっ、いっ！」

強烈な痛みにも目の前がチカチカして涙が零れ、呼吸さえ忘れた。

「っ、入ったぞ」

「あ……」

動きを止めて私を見下ろす要は、身体を屈めて息を乱していた。

「大丈夫か？」

「うん……要も……平気？」

「ああ」

やっと、彼と一つになれた。

そう思うと、彼と繋がった部分のジンジンと痺れるような痛みも愛おしく感じられる。

少し近くなった彼の顔に手を伸ばし、両手でその頬を包み込む。

「要……好き」

「俺もだ……友伽里、ずっと、俺の傍にいてくれ」

いつもなら照れてはぐらかしてしまう私の言葉にも、要は真っ直ぐ私を見ながら応えてくれる。

そんな彼の真剣な表情に胸がキュッと甘く締め付けられた。

「……うん」

私が頷くと、要の手が私の頬から首筋を辿り、鎖骨、胸、お腹へと下りていく。

その指先が触れたところから震えるような感覚が湧いて、私は小さく身を振った。

「……もう、動くぞ」

ゆっくりと小さな動きで膺壁を擦り上げられた途端、引き攣られるような痛みが走って、私の身体に力が入る。

すると要の屹立したものが私の中でびくりと震えた。

「っ！ ……締め付けるな」

「んっ、だつて……」

「加減できなくなるだろ……力抜け」

「はっ、んっ、わ、わかんない……」

次第に律動が大きく、速くなる。その度に彼が侵食する部分からは、痛みを混じって熱が湧き上がり、次第にむずがゆさに似た感覚も生まれてきた。

「要っ……あつ、また、熱い……な……な……変っ」

「気持ち良くなってきたんだ」

「ふっ、あつ……要は？」

「何がだ？」

「……気持ち、良くない？ ……要も……良くなって……」

そう言うのと、眉間に皺を寄せてまた辛そうな表情をしていた要は、いきなり私の左脚を持ち上げて肩に担ぎ、私の身体を横にひねった。

ジンジンとする内側をゴリッと抉られ、痺れるような疼きが走り、身体が震えた。

「やあっ！」

「クソっ。こっちは我慢して、優しくしようとしてなのに、何で煽る」

ぐっと腰を打ちつけられ、要のものが子宮の入り口に触れる。

「ああっ！ 要っ、んっ」

「全部、呑み込んだな」

「はんっ！ あっ、あっ！」

激しく揺さぶられて、かき回されて、頭の中が真っ白になっていく。

必死にシーツにしがみつきの、喉から零れる喘ぎを一生懸命堪えようとするけれど、それを許さないとばかりに要が身体を揺らしてくる。

ベッドのスプリングが悲鳴を上げるようにギシギシと軋み、ぐちゅぐちゅと激しくなる水音と熱に浮かされたような私たちの吐息が激しさを増していく。

それと共に、私の身体にはむずがゆさを通り越し、甘い疼きがどんどん広がっていく。身悶える身体が反り上がり、足の指先には力が籠る。

「あっ、かな、めっ……わたしっ、またっ」

膨れ上がる熱と疼きに身体が爆ぜてしまいそうなのに、身体は要からもたらされるものを受け止めようと彼の屹立を貪欲に絡め取っていた。

「イけ……俺も、イク」

「ううんっ！ あっ、ひっ、あああっ！」

墮壁の一点を突かれた瞬間、これまでにない刺激が突き抜ける。身体が激しく震え、また目の前が真っ白になった。

悲鳴のような声を上げて、私がベッドに沈み込んだ瞬間、要も動きを止め、低く呻く。

少しして要は、私と向かい合うようにベッドに横になり、息を乱したまま私の身体を抱きしめた。

私も疲労感にくらくらしつつも彼の身体に腕を回し、縋りつくように抱きしめ返す。

朦朧としたまま彼の忙しなく上下する胸に頬を寄せる。

そうして暴れるような鼓動を耳にしながら、私は意識を手放した。

とても、幸せだった。

その幸せが、ずっと続くと思っていた。

だけど、それから二ヶ月。要が十九歳の誕生日を迎えた数日後に、要の従兄が亡くなった。

要と従妹の目の前で、暴漢に刺されて殺されたのだ。

それをきっかけに、少しずつ、要と私の歯車は狂い始めた。

§ § §

「異動になった」

九年前の三月下旬のこと。私も要も二十三歳。ミシュランガイドにも紹介される高級中華料理店の個室席で円卓を囲みながら食事していると、ふと要がそう告げてきた。

「異動？」

「ああ」

彼は何てこのないように答え、ターンテーブルの上に置かれたお皿から油淋鶏を豪快に取り分けて、食事を再開する。

要は四年前に起こった従兄の死亡事件をきっかけに警察官をめざし、大学卒業後、警察のキャリア官僚になった。

彼の従兄を直接死に至らしめた犯人は現行犯逮捕されたけれど、事件はそれで終わってはいなかったのだ。

事件の根本的な原因は、このあたり一帯で活動している大規模な暴力団組織の跡目争いだった。別に、従兄が暴力団の構成員だったわけでも、彼らとトラブルを起こしたわけでもない。

ただ、従兄の親友が暴力団組長の妾腹の息子で、その人が跡目に担ぎ上げられたのを機に組内で抗争が起き、相手方の人間に見せしめとして狙われたのが要の従兄だったらしい。

そしてその従兄が殺されてしまった——要と従妹の目の前で。

彼の従兄妹たちは両親と折り合いが悪く、酒乱の父親に毎日のように暴力を振るわれていたらしく、高校生だった私が要の家に行く度に真新しい傷を作っていた。やがて彼らは親元を飛び出し、要の家族と一緒に暮らし始める。それだけ要と従兄妹たちは仲が良かったのだ。

だから要は、従兄が殺された理不尽なその理由に憤り、刺される前に従兄を助けられなかったことを後悔した。それで暴力団に対して強い嫌悪感を抱き、警察官となることを選んだのだ。

そして志望通り、彼は主に暴力団、銃器・薬物対策などを目的とする組織犯罪対策部に配属されたけれど……

「もしかして、この間、怪我をしたせい？」

「それもある」

強引な捜査をしていたらしく、要は半月前に暴力団関係者から銃撃され、怪我をした。

血管の多い場所を撃たれたので出血もひどく、一時は血圧が下がって命の危険もあったのだ。最悪の事態も覚悟するようにと医師から宣告された時は、生きた心地がしなかった。

幸い手術は成功し、麻酔で眠る要の青白い顔や、点滴や医療器械に繋がれた身体を見た時には、死ななくて本当に良かったと涙が止まらなかった。

なのに、目覚めた翌日。まだ出血が続いていたにもかかわらず、要は勝手に退院しようとしてお医者様に止められて。

家族の制止すら聞こうとしない彼に、私は初めて怒った。

無茶をしてまた怪我をしてほしくない、危険な事態に陥ってほしくないという一心で。

要は渋々と言った体で、大人しく医師の指示に従って入院することを承知してくれた。

それからしばらく、私たちは何となくギクシャクしていたけれど、この日、要が退院したその足で食事に行きたいと言いつ出したので、こうして食事にやって来たのだった。

「なあ、友伽里」

食べるのを止め、箸を置いた要が真っ直ぐ私を見る。

ただならぬ緊張感に私も箸を置き、居住まいを正して要を見つめ返す。

「俺と別れてくれ」

放たれた言葉に、咄嗟に反応できず固まってしまふ。

今、要は何と言ったの？ ……別れ……る？ どうして？ ギクシヤクはしていたけど……

要を見れば、その瞳には強い決意と鬼気迫るような何かがあり、決して冗談で言っているのではないと分かる。

「お前を悪いようにはしない。だから、別れてくれ」

頭を下げた要に、ずきつと胸が痛む。

「理由を教えてください」

「理由は言えない」

「もしかして、無茶なことをするつもりなの？」

もしかして今回の事件のせい？

また、怪我をするようなことをするつもりなの？

要は仕事についてはほとんど何も話してくれない。捜査に関する内容が多いから当然なのだけ  
ど……

顔を上げた要は、少しの間つり目がちな瞳を伏せ、やがて首を横に振る。

「しない。約束する」

モヤモヤするし、どうしてもという疑問が消えたわけでもない。

ただ、要は強引だけど、これまで嘘は一度もつかなかった。

別れたい理由なんていくらでもそれらしく言っただけ私を納得させることも可能なのに、不器用で誠  
実な要はそれをしない。

「俺の私怨に、これ以上お前を付き合わせるつもりはない」

無口な彼の少ない言葉からキーワードを繋ぐ癖がついていた私は、何となく悟ってしまった。

今は、要が従兄に贖罪するための、重要な時期なのだ。そして、私が傍にいることは要にとっ  
て都合が良くないことなのだ。

「……いいわ。別れましょう」

嘘。本当は別れたくなんてない。

でも、彼の負担にはなりたくない。

従兄の通夜の夜、要の口から聞いた、初めての弱音が耳に蘇る。

私だけに吐き出された要の後悔の念と、従兄妹に対する懺悔の言葉は、今も忘れられない。

その前日、私たちは従兄妹たちと、彼の地元の夏祭りに出掛けていた。だけど、楽しい思い出に  
なるはずのその時間が、一瞬にして惨劇に変わってしまった。

通夜の日の夜中近く、線香を絶やさぬように一人従兄の傍に残っていた要は、明らかに憔悴して

いた。

人前では気丈に立ち振る舞っていた彼だけど、事件があつてからはほとんど食事もしていなかった。だから、私はおにぎりを作つて彼に持つて行った。

焼香台の前、二人で並んで座っていた時、ずっと沈黙を保っていた要がぼつりと呟いた。

「助けられたはずなのに……傍にいたのに、刺されて倒れていくのを、見てることしか出来なかつた……俺が、もつとしつかりしていたら……従妹を泣かせずに済んだのに」

遺影を見つめたまま絞り出すような声で吐き出された、彼の後悔。脚の上に乗せられた拳が、震えるほどきつく握りしめられているのが痛々しかった。

あれは、誰にも止められなかった。

人混みに紛れて近づいてきた男が、ぶつかつたように見せかけて人を刺すだなんて、予測しようもない。

逃げようとした犯人を咄嗟に捕まえることが出来た要は、褒められこそすれ、咎められる理由なんてない。

「……要は、犯人を捕まえたじゃない。他にも、やれることは全部、出来ているよ」

指先が真っ白になっている要の手に自分の手を重ねて、それだけ伝える。

慰めの言葉なんて、他に浮かばなかつたから。

すると要の握り拳が不意に緩み、気付けば目の前に要の制服が見えた。

抱きしめられているのだと気付いた時、その彼の身体が震えていることにも気付いた。

「もつと……強くなりたい。大事な奴が、泣いたり、傷ついたりするところを……見たくない」

きつと要は、正義感と責任感が強すぎるんだ。だから自分をずっと責めているんだと思うと、私まで苦しくなる。

「うん」

「従妹を、死なせたたくない。危ない目にも、遭わせたくない」

「要なら、守つてあげられるよ……もう、私を助けてくれているもの。だから、頑張りすぎな

ごで」

「友伽里」

そんな風に心の内を明かした日から、今なお、彼はその想いを抱え続けている。

私はずっと、早く要が罪悪感から解放されることを願ってきた。

だから二十三歳のその日も、いつものように彼の背中を押すことしか出来なかつた。

たとえそれが、別れに繋がる選択だとしても。

要と別れて二ヶ月を過ぎた頃、ニュースを見ていた私は、彼が追っていた指定暴力団組織の幹部が逮捕され、大掛かりな家宅捜索が行われたことを知った。どうやらその幹部は、要を襲撃したことで墓穴を掘つたらしい。

その後、数ヶ月かけて四年前の従兄の殺人事件への関与についても取り調べられ、やがて容疑を認めた幹部が立件されたことも耳に入った。

これで要の心の負担が軽減されると思うと、自分のことのように嬉しくなったのを覚えている。別れて以来、ぶつつきりと途切れた彼との連絡。

要への想いも消えず、もらった指輪も外せないままだった私の前に再び彼が姿を現したのは、容疑者の裁判が行われたという報道があった日の夜。

少し痩せた彼の右手の薬指には、私と同じ指輪が残ったまま。

それからまた以前のように会うようになり、その年の私の誕生日。また「俺と付き合え」と、高校の時と同じぶつきらぼうな告白をされ、私は二つ返事でよりを戻した。

だけど、その後も私たちは元通りとはいかなかった。

現実には静かに、彼と私の歯車を狂わせていたのだ。

「友伽里、あいつがまたやらかしたから、行く」

デート中、電話を受けた要からそんな台詞を何度聞いただろう。

申し訳なさそうに言いつつ、既に椅子から腰を浮かせている要。私ほもやもやした気持ちを抱えながら、いつも言葉を呑み込んでいた。

従兄の仇討ちをして、落ちついたかと思われた要の生活は、ほとんど何も変わらなかった。

理由は従妹。

従兄を亡くしてから、従妹の方は荒れた生活を送るようになっていたらしい。要の家族が彼女を引き取り、何度も悪い仲間のもとから連れ戻しては説得し、根気強く更生させようとしていた。

私はその度に要とのデートを反故にされたけれど、それでも最初は我慢できた。

私がしばらく我慢をすれば、それで丸く収まると思っていたから。

だけど社会人になってからも、従妹は要たちを冷や冷やさせ続ける。

当時の彼女の行動自体は、本来悪いものではない。

カツアゲされている人を助けたり、痴漢被害に遭っている女の子を助けたり、喧嘩の仲裁をしたり……どれも、困っている人を助けるといえるものだったのだ。

だけど荒れていた頃の影響か、なまじ喧嘩慣れしていたので、犯人を必要以上に懲らしめてしまい、警察から度々呼び出されている。

そんな従妹に対し要は、彼女が自立して、安心して任せられる相手が出来るまで従兄の代わりをする決意し、それまで以上の過保護ぶりを発揮するようになったのだ。

「要」

従妹のもとに行こうとする彼を、呼び止めたことは何度もある。

行かないでと、彼にしがみつきたくなかったのも一度や二度じゃない。

『私と従妹、どちらが大事なの?』



そう聞いてしまいたくなるほど、従妹への過保護が長期化するなんて想像もしていなかった。

「どうした？」

「……あまり、怒って無茶したら駄目よ」

要は左の眉頭に皺を二本刻んだまま振り返る。それは要が不機嫌になっているサイン。原因はもちろんだ従妹。

私は怒りも本音も吞み込んで、ささくれ立った気持ちも隠す。伸ばしかけた手を止めて、裏腹の言葉で毎回、彼の背中を押すだけ。

「……ああ。また埋め合わせする」

「行っていらっしやい」

軽く私を抱きしめて短くそう言いつつ行ってしまおうを、いつも淋しい想いで見送った。

その頃、私は二十七歳。彼と付き合ってからもう十年も経っていた。

そろそろ結婚も考えたいけれど、これではいつになるかも分からない。

それとなく話題を振っても、要ははつきりした返事をせず、うやむやにってしまう。

私のこと、まだ好き？

ストレートに聞けたら楽なのに、怖くて聞けない。

私は、彼のことが好き。

なのに最近の彼は、傍にいても何だか落ち着きがない。従妹のことがなくても周囲をととても気に

するようになって、どうしたのかと尋ねても何も言わない。

それどころか、元々多くなかった口数がさらに乏しくなり、会う機会も少なくなった。そんな状況では彼が何を考えているのか汲み取ることすら出来ない。

不安ばかりが募る中、大きな爆弾は突然、向こうからやってきた。

要とお見合いをして、結婚を前提に付き合っているという女性が、アポなしで会社にやって来たのだ。要が自分に一目惚れをして、即日プロポーズされて交際に至ったなど、聞いてもいないことを一方的に散々惚気てくれた。

彼女は、自分の父親は要よりも権限を持った警察官僚だと言い、豪華な婚約指輪を見せびらかしつつ、私に向かって、いつまでも要に纏わりつかずに早々に別れるようにと告げて去って行った。

私よりも若く、モデルのような美人なのに、性格はかなり自己中心的で残念——と言うのが、その時の私の正直な感想だった。

彼女の言葉の真偽は、私には分からない。

私が欲しかったプロポーズの言葉を貰ったという発言と、その指にある、私の指輪などよりはるかに豪華なダイヤモンドの指輪。確かに、それらに動揺したのは事実。

もしかしたら……と、一瞬要を疑った自分もいる。

だけど、要は私に対して嘘はつかない。それだけは、ずっと変わらない。

そもそも、別れるのならば、以前のように要本人がはっきりと言うはずだから。

ぐらぐらと揺れる気持ちを堪えて、彼を信じ、彼女の話は戯言だと思ふことにした。その数日後、テレビでも特集された創作フレンチのお店に呼び出され、理由さえ言わず、単に冷たく「別れる」と要から告げられるまでは。

そしてまた一年後。再び私の前に現れた要は、私を捨てるようにして別れたにもかかわらず、結婚していなかった。

この一年、彼を諦めようと努力したのに、私は結局彼から貰った指輪を捨てることが出来ず、電話番号も消せなかった。心の中にある要の存在を消そうとしたけれど、出来なかった。

ひどいことをされているのに、どうしても忘れられなかった彼。

結局その時も、彼から強引に押される形でよりを戻したけれど、今はもう、私の中を占める要への感情が、愛情なのか、単なる未練なのか、それとも憎しみなのか分からない。

要は何も教えてくれない。身体の関係もなくなった。

彼が私をどう思っているのかさえ、分からない。

そんな生殺しの関係。

ねえ、要。

どうして、私たちこんな風になってしまったんだろう。

今日は、私たち三十二歳のクリスマスイヴ。休日出勤も急いで終わらせた。なのに……

要と会えるのが嬉しいと思うのに、それと同じくらい不安なの。

だからお願い。

せめて食事が終わるまでは、嫌な話をしないで。

今日は私にとって、特別な日だから。

## II

「友伽里、また異動になった」

その一言に、口元に運びかけた私のフォークが止まる。

同時に、言い知れない虚脱感に襲われた。

あれほど願っていたのに、目の前にいる要はあっさりとそれを裏切ってくれた。

よりによって、どうして今日それを言うの？ どうして今日？

思わず喉元まで出た言葉を呑み込んだものの、素敵なレストランの雰囲気ですら久しぶりに華やかに見れば目の前の男は、食事に手もつけずじっと私を見つめている。